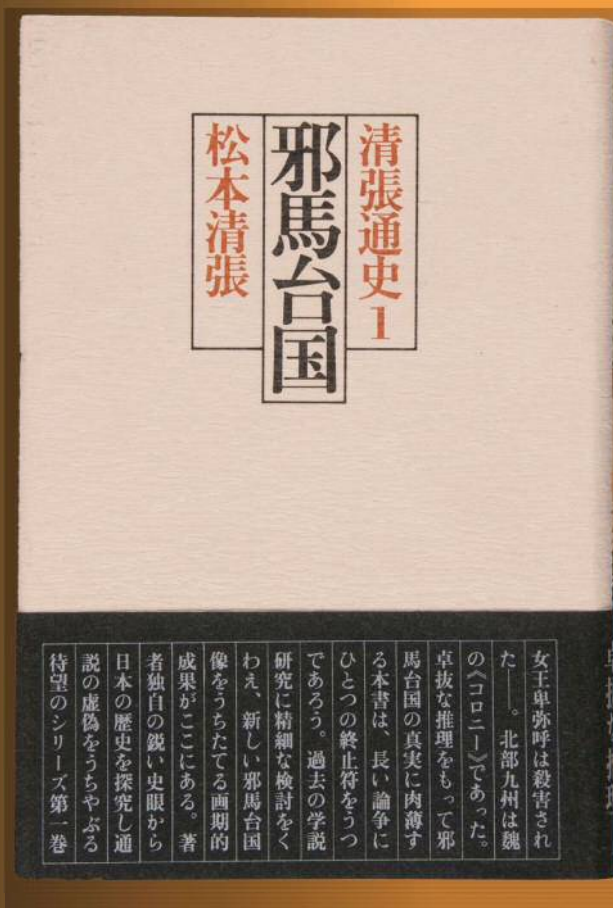


松本清張記念館

◆館報◆

2022.2
第67号

とぼしい史料は、ぽつぽつと散っている「点」である。「点」と「点」の空白に「線」をひいてつなぐのが、推理である。(略)歴史上の推理も、探偵がナゾを解いてゆくとおなじである。



結論からさききいいうと、わたしは邪馬台国は九州にあったと思う。

『清張通史1 邪馬台国』昭和51(1976)年 講談社
『清張通史』は『東京新聞』ほかで昭和51(1976)年1月1日～昭和53(1978)年7月6日に連載された。

現在入手しやすい本

『清張通史1 邪馬台国』講談社文庫、松本清張全集55巻

作品紹介

松本清張はかねて考古学や古代史に関心を寄せていたが、「古代史疑」(一九六六年)のころから歴史家としての著述を重ねる。一九七六年から連載した『清張通史』では、三世紀の倭の時代から八世紀、奈良時代末までおよそ五百年にわたる古代史を一般向けに説く。執筆にあたり、平板な歴史叙述を避けるため、内容的な中心点を設定している。そこから上流に遡ったり、下流にくだったり、あるいは違う水源からの流れ込みを確認することで、いきいきとした歴史の大河を航海することができるといふ。

六つの中心点はそのまま単行本シリーズの編成となる。①邪馬台国 ②空白の世紀 ③カミと青銅の迷路 ④天皇と豪族 ⑤壬申の乱 ⑥古代の終焉(初刊・寧楽)。

松本清張は昭和四十年代に起きた邪馬台国ブームの火付け役と言われる。清張の『邪馬台国』観がまとめられた第一巻は全集にも収録。作家の独創的な説が巻末「私説の要点」にまとめられている(文庫版では割愛)。

・「魏志倭人伝」に記される邪馬台国までの里数表記は観念的数学

・監察の役割を担った「大率」は「支率」の誤りで、帯方郡(魏)からの派遣官だった

・卑弥呼の死は敗戦の責を問われた「神殺し」などの見方が特徴である。

なお、「はじめに」で、考古学と文献史学は縦割りに陥らず、互いの成果を援用し合うことで、常に学説を修正し続けるべきとしている。単行本から十年後に刊行された文庫版では、最新の発掘調査を踏まえた訂正加筆が行われ、自ら唱えた方法論を実践している。

(学芸員 中西由紀子)

目次

シンポジウム「東アジアの中の邪馬台国」

— 清張邪馬台国論の現在 — …… 2

トピックス …… 8

二〇二〇年から二一年にかけて、北九州市では東アジア地域間の相互理解等を目的に、日中韓の三か国が様々な文化芸術イベントや文化交流を実施する「東アジア文化都市北九州」を開催しました。当館でもその開催にちなみ、清張邪馬台国論をテーマにシンポジウムを開催しました。

シンポジウム

「東アジアの中の邪馬台国」清張邪馬台国論の現在

令和3年10月10日(日)開催 北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」(参加者120名)

第一部「邪馬台国の時代 卑弥呼の倭国連合と纏向の倭王権」記念講演

講師 倉本一宏(国際日本文化研究センター教授)

松本清張先生と私

『清張通史』は高校生の時に読んで感動した覚えがあります。邪馬台国が一卷目で、五巻目が壬申の乱。私は卒論が壬申の乱だったのでかなり精読いたしました。

一方、『火の路』という有名な小説がごいます。これも私の研究者人生に大きな影響を与えています。大学のゼミ旅行で先生方と飛鳥に行ったとき、ゾロアスター教の話が出ました。すると、先生が非常に嫌な顔をされて、「作家は一割ぐらい本当なら九割いい加減でも書ける。学者は九割確定であつても一割不確定だつたら書いてはいけないのだ」と、大学一年か二年の私に非常にきつく言われたのです。

私は近代史が結構好きなので、『昭和史発掘』も精読いたしました。これは近代史の学界では高く評価されています。『国史大辞典』という一番権威がある辞典にも、参考文献として引用されています。しかし、『清張通史』が古代史で引用されることは、まずありません。古代史研究者の一員として恥ずかしいですが、いかに古代史の学界が閉鎖的な



権威主義的なところかということをおっしゃっている次第です。

なぜ「邪馬台国」について書くようになったか

私は一九八九年に大学に職を得ました。授業などで邪馬台国のことは毎年語っていました。そのころから九州説でした。それが当たり前だと思っていました。『清張通史』の影響もだいぶあったと思います。でも、邪馬台国について書くことは全くありませんでした。文献史学の人間は実証主義だから、ああいう危ないことをやってはいけないという考え方が東京にはありました。特に某国立大学ではきつく戒められていました。

では、なぜ、邪馬台国の問題を書くようになったのか。その一つは、「纏向遺跡＝邪馬台国」という大合唱が我慢できなかったのです。纏向遺跡が倭王権に、あるいは後の律令国家に繋がる大事な遺跡であることは百も承知なのですが、纏向遺跡と邪馬台国が一緒であるという風潮が常識であるかのように言われることには、我慢できません。しかも先ほども言いましたように、文献史学の人間は言わないし、書かないので、このままいくと日本中が「纏向遺跡＝邪馬台国」箸墓＝卑弥呼の墓」になってしまつと、怒りに任せて書き始めたところがあります。

そこで、北九州市の目にとまりまして、今日ここに立っているわけです。ちなみに、邪馬台国九州説の賛同者も随分増えてきました。以前は講演などでも自分で絶滅危惧種などと自己紹介していたのですが、実は結構いっぱいいま

す。九州説はそんなに少数派ではありませんので、皆さんも心を強くしてください。

まず最初に史料批判をやらなければいけない

私の専門は文献史学です。文献史学は史料をどう読むかという仕事です。その前提として、この史料はどうやってできたものか、どこまでが信用できるのかという、史料批判を一番にやらなければいけません。

松本清張先生も邪馬台国研究の史料批判については、『倭人条』だけを見たのでは駄目なのだとおっしゃっていました。『夷蛮伝』も全部見なきゃいけない。これは今日のシンポジウムの論点の一つでもあります。私はさらに、中国の二十五史を全部見て、いろんな地域、いろんな時代の外交史料を全部見た上で、『倭人条』を読まないといけないと思っと思っています。

『魏志倭人伝』と言われるこの史料は、魏に関する史料です。魏の使者はどこまで来たのか、どこまで実際見たのか。超大国の外国の人がやって来たなら、倭国の人はいい所ばかり見せるに決まっています。だから、風俗史料や社会史料が本当に倭国の実態を反映しているのか疑問です。あるいは、倭国はこんな所だろうと思っっている中国人の通念、あるいは書いた人の政治的立場などもきちんと考えないといけないと思っっています。その上で、史料の価値を判断しなければいけません。

複数王権は当たり前

一番の疑問は、倭国に王権は一つしかなかったと大前提のように言っている人が多いことです。邪馬台国が日本の統一政権だとか中央王権だということも多い。しかし、倭国に王権が一つしかないどころに書いてあるのでしょうか。纏向遺跡は立派な遺跡で、そのまま倭王権に繋がるのはわかりません。しかし、それが邪馬台国なのかということ。つまり、複数の王権があつていいのではないかと、ごく当たり前のことです。世界中の国を見ても、一つの地域にいろんな王権があるのは当たり前です。それが淘汰されていって一つにまとまるわけですが、倭国だけ何故、最初から一つしかないと思っのか理解できません。

私は邪馬台を「やまと」と読んでいます。この「やまと」という言葉が今の奈良県を指すようになったのは奈良時代の

後半です。弥生時代の国というのは大体今で言う郡とか、その下の郷ぐらゐの大きさです。遺跡でいうと環濠集落一個くらいだと思います。弥生時代の国「やまと」が、奈良県全体の大きさがあつたとは思えません。むしろ「やまと」とは、山の門とか、山の戸とか、つまり山と山がこう両側から来ているところ、小さい地域を指すのだからと思います。すると、大和国の「やまと」ではなくて、後の律令制で言うところの「筑後国山門郡」とか、「肥後国菊池郡山門郷」ぐらゐの範囲がふさわしいと思います。

もう一つ、中国ではどうも、倭国と日本国と蝦夷国を別の国だと思つていたらしいということがあります。これは、アメリカ国会図書館所蔵の一二世紀の古地図です。これが朝鮮半島、これが中国です。よく見ていただくと、これが倭なのです。これが日本なのです。これが蝦夷国なのです。そして、これが琉球なのです。つまり、日本国と倭国は違う島である。となると、この倭国は、おそらく九州のことを指していると思います。つまり、中国ではだゐん後になるまで、日本国という島と倭国という島は別であつて、倭国は小さいのだという認識がずっと続いてきたことを示しています。

纏向遺跡と倭王権

次に纏向遺跡を考えてみましょう。この遺跡が一〇〇%、初期倭王権の最初の都だろうと思います。そして、二八〇メートル以上あつた箸墓古墳が初代の王墓であることも一〇〇%確実です。遺跡からは全国各地の土器が出ています。数年前に神殿の跡だと思われる柱穴が出てきました。



問題なのは、纏向大溝といわれる運河が二本通つていることなのです。この運河を通れば、巻向川から大和川に行つて、大阪湾で瀬戸内海へ流れ込みます。瀬戸内海から九州に行つて、朝鮮半島に行つて中国に行けます。逆に言うと、中国の船がここまで来られる。東の方に行くと、初瀬川から名張川、山一つ越えたと雲出川があつて、伊勢湾に流れ込みます。そこから船に乗ると、東日本に行けます。

つまり、纏向遺跡は東にも西にも開かれた、オープンな都なのです。それまでと全く違う権力であることが分かります。しかし、『倭人伝』を読む限り、邪馬台国はどう見ても環濠集落に見えます。環濠集落は、周りを堀で囲つて、柵を作つて、下に棘々を作つたり、糞尿を貯めたりして、非常に防衛性の強いものです。だから纏向遺跡は邪馬台国とは全然違う権力で、初期倭王権の最初の都と見た方がよろしいと思います。

箸墓古墳は非常に綺麗な形をした古墳ですが、全く同じ形で縮小された古墳が全国に見られます。箸墓型前方後円墳と言います。これはおそらく、纏向遺跡の権力と同盟関係を結んだ豪族に、「お前のところもこういう墓を作れ、大きさはこのぐらゐ」と指定して作つたと思います。北部九州で作つているのは、豊、筑紫ではなく、瀬戸内海に面したところで作つています。ということは、豊は纏向の倭王権と関係を結んでおり、筑紫平野を中心とした権力とは別個な権力であつたと考えられます。

卑弥呼の権力

私が気になつて居るのは、卑弥呼はそんなに権力があつたのかということ。弟が俗権力を担つて居るわけです。邪馬台国の内部でも、卑弥呼はあくまでシャーマンであつて宗教的権威に過ぎない。男が権力を握り、女が権威を高めるといふのはよくあるパターンです。例えば、アマテラスとスサノオなどもそうです。

もう一つ思うのは、福岡の糸島にあつた伊都国が倭国連合全体の俗権力を担つて居るのではないかとということ。伊都国が外交や、諸国の検察をやつて居るとも書いてあります。俗的な権力は伊都国が担つて居る。倭国大乱の前に、倭国連合の中心で、本場に強かつたのは伊都国だつたのではないかと。だから、邪馬台国は宗教的指導者が居るところに過ぎないという感じがします。卑弥呼は大乱を収めるために女王に共立されただけの宗教的権威に過ぎず、相変わらず権力は伊都国が握つていたのではないかと考えています。

邪馬台国はどこか？

『魏志倭人伝』に、「郡より女王国に至るは、万二千余里」と書いてあります。帯方郡(ソウルの近辺)だろつと言われ

ている)から女王国(邪馬台国)まで、一万二千余里です。狗邪韓国までが七千里で、そこから千里で対馬。また千里で一支(支岐)。そこから千里で末盧(松浦)。そこから五百里で伊都。万二千余里から、帯方郡から伊都国までの里数を引いた、千里ちよつと(対馬から一支ぐらゐの距離)を、伊都国から南に行けば、女王国(邪馬台国)に至るとみて別に構わないと思います。無理に南を東に変えてはいけません。字を変えなくても解釈できるものは、変えてはいけません。というのが歴史学の原則です。

で、多くの人が解決のつかないのが、「水行十日、陸行一月」という記事です。「南 邪馬壹(臺)国に至る。女王の都する所。水行十日、陸行一月」と書いてあります。ほとんどの人はこれを、伊都国から、南に十日船に乗る、上陸してから一か月歩くと解釈しています。しかし、それでは九州を突きぬけてしまうので、京都の先生の中にはこの南を東なんだと読まれた方がいました。福岡から東に十日で難波に上陸する。そこから一か月歩いたら、奈良に着くと。一か月も東に歩いたら関東とか東北ぐらゐに行つてしまふと思います。なぜ奈良になるのか全然わかりません。

普通に考えたら、「女王の都する所」ここで一旦、もう里程記事は切れているわけです。で、「水行十日、陸行一月」と書いてある。普通に読めば、帯方郡から、船に乗つて朝鮮半島の東の方、南の方、そこから対馬や一支や末盧に行くのに大体十日ぐらゐ、陸を歩いた場合は一か月と見るだけでいい。私は、邪馬台国は糸島半島から南に数十キロのところにあつて、何の不思議でもないと思います。伊都国の南千数百里、せいぜい三、四〇キロメートルとなると、筑後国山門郡。もうちよつと南に行くと、肥後国菊池郡山門郷。筑後の山門郷は、今で言うと、久留米や八女からみやま市ぐらゐになると。思います。

ただ、邪馬台国はこの連合の中で最強でもなく、列島の中心権力でもないのですから、そんなに気にしなくてもいいと思います。邪馬台国は宗教的権威の卑弥呼という人が居住してただけの地方王権の一つで、各地に同じような地方王権があつたと見た方が自然だと考えています。早い時期から、日本列島に強力な統一政権ができていたと考える考え方は、非常に危険であると思います。何となくその

また天皇家に続きましたよという、万世一系を主張したいのではないかと勘ぐりたくもなりません。

八女に注目

私は個人的には八女というところを非常に注目しています。というのも、六世紀の筑紫磐井の本拠地が八女であるということ。もう一つは、七世紀の白村江の戦いの時に、唐の捕虜になった筑紫薩野馬という人もたぶんその辺の豪族だろうと思います。かつての邪馬台国があった地から、六世紀の磐井、七世紀の薩野馬が出ていると考えております。

六六三年、白村江の戦いが起こりました。白村江の故地はセマングム干拓地と呼ばれて、今、巨額の費用を投じて干拓しています。日本史上最大の敗戦である白村江がもうすぐなくなってしまうのです。白村江に行つて唐の捕虜になつた筑紫薩野馬さんを、部下であった大伴部博麻という人が自分の身を売つて日本に帰しました。薩野馬は筑紫君と書いて、磐井と同じ姓です。相変わらず筑紫地方を支配していた豪族がいたというわけです。

さて、北部九州地方、筑紫地方は、瀬戸内海沿岸より遅れて倭王権と同盟を結びました。しかし、完全に服属したのは、磐井の乱での敗戦後、六世紀の前半であります。磐井の墓の石人は有名ですが、大和軍が顔とか手とか首とか打ち割つたと書いてあります。

第二部 パネルディスカッション

「東アジアの中の邪馬台国」

清張邪馬台国論の現在

基調発表

片岡宏一

邪馬台国の時代、中国では日本を「倭」と呼んでいました。『魏志倭人伝』にも「倭」のことが書かれているので、当時の中国が「倭」と呼んでいた地域はどこかに邪馬台国があるということになります。



磐井の乱はなぜ起こつたのか。磐井さんたちは独立政権でして、倭王権が百済と外交関係を結んで加耶を救援しようとしているのに対して、新羅と結んで独自の外交をしていました。この独自外交を、『日本書紀』は天皇中心の万世一系の思想で説きますから、倭王権の外交に反対した反逆者として描かれるわけです。

磐井さんたちは負けましたが、磐井さんのすごさをその墓の作り方に見ることが出来ます。磐井さんの墓である岩戸山古墳は前方後円墳で、形だけは倭王権に服属しています。大ききもその時の大王、継体の古墳(今城塚古墳)は一七〇メートルぐらいあり、磐井さんの墓はそれよりは小さく、二三〇メートル前後。継体から、俺の墓よりは小さいのを作れと言われたのでしょうか。ところが、表向きは言われた通り作っておきながら、別区という四角いエリアを別に作つて、それを合わせると、ほとんど一七〇メートルになって、大王と同じになるように細工しています。すごい気概です。磐井さんって僕、大好きなんです。

これで北部九州も完全に倭王権の傘下に入りました。ところがすごいのは、地面より上では服属しているふりをして、地下では全く別の古墳を作っています。装飾古墳のほとんどは北部九州です。独自のこの文化は、中央に対する無言の抵抗なのだろうという気がしております。

コーディネーター

久米雅雄 (大阪芸術大学客員教授)

倉本一宏 (国際日本文化研究センター教授)

片岡宏二 (小都市埋蔵文化財調査センター所長)

北橋健治 (北九州市長)

では、中国が「倭」と認識していた場所はどこだったのでしょうか。

中国の文献に出てくる「倭」

「倭」の初出は『漢書地理志』です。「夫れ楽浪海中に倭人有り。分れて百余国と為る。歳時を以つて来り献見すと云ふ。」という有名な文章には、紀元前二世紀から一世紀の中国前漢時代における日本のことが書かれています。この時代、倭人はクニを作り、定期的に貢ものを持ってきたのです。

では、なぜ倭人ははるばる海を越え、中国との交渉を求めたのか。文化の進んだ中国には、金属器や織物など倭人たちの生活を豊かにする道具があり、倭にとつては魅力あるものでした。中国から来た品々は現在、日本国内の遺跡から遺物として発見されます。それらが発見されるところが、中国と交渉を持った地域であり、中国が「倭」と認識した地域です。

楽浪郡設置前後の「倭」の領域

倭人は中国の都、洛陽に直接行つたわけではありません。朝鮮半島にあった中国の出先機関である楽浪郡(北朝鮮の平壤付近)に朝貢しました。ここから正式な外交が始まりました。倭人が入手した中国製品の代表的なものは鏡です。

鏡は特に倭人が好んだものでした。地域を治めた首長(リーダー)は、自分が死んだ時に宝物として棺桶の中にその鏡を入れさせました。甕で作つた棺桶、甕棺に死者を葬る風習は弥生時代に北部九州で流行しました。中国の鏡が甕棺に入る時代は楽浪郡ができて、そこから鏡が輸入される紀元前一世紀以後のことです。この時期の鏡が甕棺から発見された範囲を見ますと、北側から対馬島、壱岐島、松浦半島、糸島半島、福岡平野、遠賀川流域、そして筑紫平野北部までの北部九州です。

もう一つ、倭人が好んだものに布製品があります。特に絹織物は『魏志倭人伝』の中でも、中国が卑弥呼に送つた品物の中で突出して数が多いものです。この絹製品が発見された遺跡もやはり北部九州に多く、大体、鏡の分布に一致しています。これらの分布範囲が当時、「倭」と認識されていた地域でしょう。

邪馬台国時代の「倭」の領域

『魏志倭人伝』には、「倭國亂れ」とあります。「倭國」はもともと男の王がいましたが、うまく統治できずに戦乱になりました。そこで、卑弥呼という「女子」がクニグニによって、王として「共立」されたと書かれています。

二世紀中頃には、まだ近畿地方では纏向遺跡は出現していません。その前の段階にも、纏向遺跡のような大きな遺跡は出現していません。そうすると、ここで言う「倭」とは、弥生時代を通して、歴史的・文化的に発展していた北

部九州こそがふさわしいと私は考えています。

二世紀中頃以降の邪馬台国時代の有力な遺跡を点で落としてみますと、突然遺跡がなくなる遠賀川流域を境界にして、西のツクシと北九州市の入る東のトヨに分かれます。ツクシのうち筑紫平野にある環濠を巡らした遺跡群が網の目のように築かれたネットワークこそ、私は邪馬台国連合だと考えています。邪馬台国＝筑紫平野連合説です。

では、邪馬台国はこのどこですか？と質問を受けることがよくありますが、私にはわかりません。邪馬台国時代の筑紫平野の遺跡はどこも同じような規模で、どこかに特別重要なものが発掘されているわけでもありません。強いリーダーが出現して全体を率いることを望んでいない、と私は思っています。年若くて、政治経験もない卑弥呼が国々によって共立されたという事情からも、そういうことが言えるのではないかと思います。筑紫平野の遺跡群の特徴は、お互いに足りないものを補い合っていたことですが、ここが一つの巨大遺跡で何もかもが備わっている纏向遺跡との大きな違いです。

前漢時代には、中国の認識する「倭」は北部九州のツクシ圏の北側ぐらいまででしたが、邪馬台国時代には、筑紫平野南部まで広がっています。私はさらに狗奴国と考えている熊本県も「倭」の一部と認識されていたと思っています。

私の邪馬台国論争

邪馬台国時代に近畿地方では、纏向遺跡という巨大な遺跡が出現しました。ツクシとは違ってこの遺跡だけに、集落も墓も特殊な遺物も集中しています。これが後のヤマト王権につながることは、もはや否定しがたいものになっています。

邪馬台国論争を語るとき、九州か近畿かという問題は、単に所在地を争うだけではありません。邪馬台国時代に日本という国が近畿に誕生していたのか、まだ九州にあったような部族連合的な体制だったのかという問題なのです。

近年、考古学の世界では、近畿説が有力になってきています。纏向遺跡から重要なものが発見され報道されるたびに、その論調が高まっている感じがいたします。その点は

倉本先生と同じような感覚を持っています。けれどもよく考えてみますと、邪馬台国論争は、どちらの政治体制や文化が進んでいるか、或いは、どちらの規模が大きいかを争うものではなくて、『魏志倭人伝』の描いた社会が九州か近畿かという問題なのです。

ところで、話は飛びますけれども、私も清張が大好きです。清張の描く世界にはいつもその時点の問題、例えば『点と線』では、それが書かれた戦後社会の社会問題をはらんでいるからです。

邪馬台国論争で、中央集権的な近畿説が近年優位になった背景には、現代の国家に対してみんなが固定した見方を持つてしまったことがあるのではないのでしょうか。邪馬台国を考えると、私たちは知らず知らずのうちに、東京に権力が一極集中した強い政府を国の姿はこれしかないと思いついでいるような気がします。邪馬台国論争というのは、弥生時代にあった国を論じる問題だけではなくて、現代の問題だと思っています。この問題は、これから日本がどういう国であるべきかを考えさせる問題なのだろうと思います。

基調発表

全くのアマチュアのア私
が申し上げるのも恐縮で
すけれども、本日は個人の
資格でお話しいたします。



北橋健治

清張先生の『清張通史』を
読むと、改めて、実に明快
な論旨、鋭い深読み、そし
て内外の史料を駆使され
ていることが分かります。大胆な仮説にはすぐに共感で
きないものもあります。しかし、一度、昔のこびりついた
考え方を破算にして、もう一度、古代の霧に包まれた
世界に入っていくという、元気を与えてくれる素晴らしい
作家だと思っています。清張先生が北部九州説を
とっておられることは大変に心強いことです。そして、
国の歩みを考えるときに、東アジア全体の大きな流れの
中で考えていくことが大事だという、清張先生の視点も
重要なのです。

卑弥呼、以って死す

その中で「卑弥呼、以って死す」というくだりがあります。これは事実上、殺されたのではないかと指摘です。しかし、邪馬台国の時代は疫病や大災害、飢饉、そして戦争があった非常に不安に包まれた時代でした。天変地異の背後にある超越的なものへの畏怖、また人間の生死に関する思いも、今と違って、非常に重要な身近なものではなかったかと思えます。そうした時代に、卑弥呼は長い間、衆望を集めていたことは事実ですから、それに相応しい最期ではなかったかと私は思います。卑弥呼は最後は伊都の国に戻り、平原遺跡に埋葬されたのかもしれないという気がしております。

考古学は地域を元気にする・素朴な邪馬台国東遷説

考古学は、地域を元気にする、住民を元気にするという点があります。
軍事力、農業生産力の決め手は鉄であります。それから絹織物もそうです。それで鉄を買ってくるのができま
す。鉄の出土を見ても断然、北部九州、熊本が大変多い。
東遷説を考えると、私が中学生の時には、和辻哲郎
さんのお考えを学校で習いました。弥生時代に畿内から
東側で祭祀に使われた銅鐸が、突然、打ち捨てられたよう
に消えていく。もし邪馬台国が近畿圏で発生し、そのまま
大和朝廷に発展したのなら、銅鐸の記憶が残っているはず
なのに残っていない。邪馬台国が九州から来て、銅鐸文化
を打ち滅ぼし、大和朝廷を樹立し日本を統一したと考
えるのが妥当である、と。筑紫国と大和国の山の名前や地
名などの類似や、古事記での地名の出現を見ると九州が
一番、二番が出雲、畿内はあまり出ていないことなども、
九州からの東遷で説明できるかと思っています。

畿内説 — 纏向遺跡

纏向遺跡の出現は先ほど三世紀という話でしたが、その一つの論拠に炭素14年代測定法があります。しかし、一七〇〇、一八〇〇年前となると、百年から百数十年間ぐらいの誤差が出るのではないかと言われています。このような科学的アプローチも、より精密な検討が必要でしょう。纏向遺跡は突然、集落のないところに現れる。それは東遷で説明できるのではないかと。東遷した政権がそこに

拠点を築き、全国に号令をかける、そういう政治都市として出現したのではないかと考えるわけです。

張政の派遣

二四七年に帯方郡から使いの張政がやって参ります。卑弥呼は亡くなります。また男の王が立って、また国が乱れます。そしてトヨが共立され、張政は倭国に留まったのではないかと思います。張政は当時、外交、防衛、軍事、技術、あらゆる面での最高の知識人でした。この一九年間、トヨをはじめとして新政権にとっては大変心強い助言者であったろうと思いますが、張政は邪馬台国において何をしたいのでしょうか。張政は部下に船を使って列島を一周させ、倭の国の地図を作らせたのではないかと思います。そして、富国強兵、殖産興業が必要だと説き、新政権の人たちも頑張ったと思います。

なぜ『日本書紀』は邪馬台国のことを

書かなかったのか

六世紀前半の磐井の乱が決定的だったと思います。磐井の乱は、一回目は非常に強くて朝廷が敗れる。二回目は大軍が来て、磐井は敗れてしまいます。これによって筑紫国、旧邪馬台国倭国連合は朝敵になりました。ですから、大和王権の中の東遷勢力(九州に縁のある人たち)は立場がなかったと思います。

こうした思いから、九州から神武が来たように、九州からルートがやってきたことは認める。しかし、九州に縁のある人たちもそのあとの筑紫の倭国の政権とは関係がないと言わざるをえない状況になったのではないかと。これが、『日本書紀』に邪馬台国のことが出てこない理由だと考えます。

基調発表

久米雅雄

私も卒業論文が「倭国大乱と邪馬台国」に関するものです(一九七〇)。今日は一九八六年に出版した『新邪馬台国論—女王の鬼道と征服戦争—』の要点を簡略に、話させていただきます。東遷ではなくて、九州を根城にして東へ攻めて行ったという、『日本書紀』などと同じ



「東征」の概念で捉えております。

松本清張邪馬台国論との出会い

私は、『或る』小倉日記『伝』、『風雪断碑』、『石の骨』、『陸行水行』などを通じまして、優れた作家が登場されてきたということには、若い頃から知っておりました。大学に入學した一九六六年には、『古代史疑』という、甚だアマチュアとは思えない専門的な論考が出されました。以後、清張先生の作品に歴史学的な分野でも親しむようになりました。

一九八六年には『清張通史1 邪馬台国』が出ました。文庫本も出ております。大変分かりやすく、邪馬台国論争という学術的な問題を、一般庶民のレベルまで持ってきて、誰でも参加できる論争にしたという点で大変高い評価を受けておられます。

一大率という問題は当時、圧倒的に卑弥呼の作った国内の派遣官という考え方が強かったのですが、清張先生は中国側(帯方郡)にその任命の主体があるとおっしゃった。同志社大学の森浩一先生をはじめ、多くの専門家の方々が高く評価されました。

私の「新邪馬台国論」

—女王国(九州)と邪馬台国(畿内)は別々の相異なる二国—
問題はこの女王国です。『魏志倭人伝』を読みながら、点と線でたどっていく時、「邪馬台国の女王、卑弥呼」とい言う方は間違いだらうと思ったのです。「女王国まで万二千里」という記述はあるが、「邪馬台国まで万二千里」ではないのです。

女王国まで万二千里で一応切つて、それまでのプロセスを全部足すと不弥国まで一万七百里になるので、引き算すると残りは千三百里。要は不弥国とか伊都国から千数百里の所に女王国はある。つまり畿内までは届かないので、女王国を九州(狗奴国の北、海を渡った倭種の国の西)に想定する。私の「新邪馬台国論」は、女王国と邪馬台国は全く別の二国という発想なのです。水行二十日で投馬国、さらに十日で邪馬台国に至る。「女王の都するところなり」と書いてあります。大事なところです。『延喜式』という平安時代の本の中に、太宰府までの海路が書いてあります。平安京から太宰府までの間が海路三十日と書

いてある。海路三十日は、投馬国までの二十日とさらに十日で邪馬台国に至るというのと合致しますから、私は邪馬台国は畿内ではないかと発想したのです。また、方角については、秋分〜冬至〜春分の時期の日の出が真東より南寄りであることで解決すると考えています。

女王国は万二千里ですから九州にある。その女王国が中心になって、東に水行三十日のところに新しい国を作らせた。畿内に邪馬台国を作った。倭国大乱以後に、筑紫女王国と畿内邪馬台国という二元論的な構図を考えたのです。

卑弥呼の鬼道も、ただのシャーマンではない。『三国志』の中で鬼道を探すと、「張魯伝」の中に鬼道が出てくる。五斗米道です。道教系の鬼道です。階級組織もあり、互助組織もあり、軍備もある宗教教団です。だから、フランスのアンリ・マスベロは「信者たちの軍隊」と呼びました。「倭国大乱」の時にも、それと類似した性格のものが、長い時間をかけて、九州から吉備などの政権を合流させながら東へ東へ広がっていった、邪馬台国ができたのではないかと考えます。

デイスカッション

清張邪馬台国論の問題として、①「東夷伝」の中の「倭人の条」、②東アジアの中の「一大率」、③清張の九州説—「璧」の重視、④卑弥呼殺害と消えた邪馬台国の4つのことについて、デイスカッションが行われました。本号では、その一部を掲載します。
(全文は今春発行予定の『松本清張研究』第23号に掲載します)

「東夷伝」の中の「倭人の条」

【久米】今日、倉本先生のお話を伺って興味深く感じたのは、里程を考えると、帯方郡から見ているところですか。どういってお考えでこういう新しい見地に立たれたのか、倉本先生、一言だけいただけたらと思います。

【倉本】はい。全く特別な見方をしたわけではございませんで、「南、邪馬壹臺」国に至る。女王の都する所。水行十日、陸行一月です。その最初の文章はたぶん、「郡より倭に至るは」というところから始まっていると思うんで、距離でいうところだよ、邪馬台国になるよ、そこに女王がいるよ。郡からそこまで行くには「水行十日、陸行一月」だ

から、最初の「郡より倭に至るは」というのがまだ続いているのだらうと、かなり早い時期からこのように読んでいます。

【久米】「水行十日、陸行一月」の起点が帯方郡というところが新しく、従来一般には説かれてこなかったご意見だったと思います。

一大率は帯方郡の派遣官

【久米】一大率の問題は、どういうふうにご考えたらよろしいでしょうか。北橋市長、お願いします。

【北橋】はい。清張先生のご指摘は、最初読んだときには衝撃的な指摘でした。ただ「中国の刺史の如し」という表現がありますので、自分なりに考えると、一大率の設置は邪馬台国と魏、両者にとつてメリットがある協定だと思えます。邪馬台国としては中国の権威を利用して、税関のように交易ルートを独占できるわけで、一方の魏の方も、倭国に駐留する大義ができるわけですから、これは願ってもないこと。とりわけ邪馬台国にとつてみれば、一大率は広域圏のしっかりとした掌握を魏の権威のもとに進めるという大きなメリットがあったと理解しています。

【久米】政治的な視点のみならず、経済も視界に入った実際的なお話かと思いました。ありがとうございます。

その一大率の置かれた伊都国は、『魏志倭人伝』に「世々王有るも、皆女王国に統属す」とあるように、王がいたので、奴国に王の記載はない。だから伊都国の俗権の力は非常に強いものがあったと思われまます。

また西暦五七年にもらった「漢委奴国王」金印を、私は「かんのいとこくおう」と読みます。江戸時代は京都の藤貞幹、大阪の上田秋成、福岡の青柳種信などはみんな「いとこくおう」と読んでいました。「委」という字は「にんべん」がない。これは単なる省画の問題ではなくとも重要なことで、金印に「にんべん」がないということは、印字の立場から見れば、非常に高い扱いを受けているということなのです。

また、糸島の地域には、吉武高木という朝鮮系遺物が入った遺跡(福岡市西区)のあと、三雲、井原鐘溝、平原などの紀元前一世紀から紀元後一世紀、三世紀頃の王墓が当地域に集中しており、鏡が二〇面も三〇面も四〇面も出ています。その王墓の分布域から考えて、やっぱり糸島は注目に

値する。

清張先生も伊都国を大変重視されておられます。最初は金印を「かんのわのなのこくおう」と読んでおられましたが、途中で「かんのいとこくおう」に考え方を改めておられます。

五七年の金印をもらったちょうど五〇年後、一〇七年、永初元年に、倭国王帥升等が後漢に使いを遣わして、生口一六〇人を献じたこと書いてあります。その倭国王を、「倭面土」と書いてある他の文献、北宋版『通典』があります。その三文字を、京大の内藤湖南先生は「やまと」と読みました。僕もその読み方には賛成なのですが、内藤先生は畿内に想定、僕は九州に「やまと」国があったと思っっているのです。「倭面土」国王の帥升らは一六〇人も生口を献じています。余程の力が二世紀の前半の北部九州およびその周辺にはあったと思います。その「倭面土」国連合勢力が東方にベクトルを動かして征服戦争の結果、畿内に新しく都を定めた国が『魏志倭人伝』に出てくる邪馬台国であると思っっています。

消えた邪馬台国

【久米】最後に、北橋市長にお伺いしたいのは、消えた邪馬台国についてです。レジメの中にあつた、筑紫が出雲を追撃した時期はいつ頃とお考えなのか。あと、東遷の時期は何世紀のいつ頃とお考えなのか、簡単にお願ひします。

【北橋】張政が倭に残つて倭の国を調べた。ずっと見ていくと、出雲の国が非常に大きなネットワークを持っていて、出雲の国だと多分理解したと思ひます。従いまして、国を豊かにするには、最大の扇の要は出雲だとなつたと自分では思ひます。この出雲とは、『古事記』では二回は和平をしようとして、三度目に武闘派の大将を送り込んで戦鬪になるわけです。北部九州は強く、出雲の国は和睦を結ばざるを得なかつた。祭祀については大宮殿を認めてもらうという条件になつたらうと思ひます。出雲への進撃は、二六六年に張政を盛大に見送つたその直後ぐらいではなかつたでしょうか。

そして今度は、いよいよ瀬戸内の中央部分に出ていく。二七〇年代、八〇年代ごろには、橋頭堡を畿内に築いてい

たと思ひます。まもなく疫病が流行り、半分が死んだ。その時に、出雲の神様を祀つて収まつたと『日本書紀』には書いてあります。もう一つ、後継者の垂仁天皇の時には、子供が言葉を喋れなかつたのが、出雲の神様に頼みに行つたら口がきけるようになったと『日本書紀』が明記している。つまり、出雲の神様との連盟は大和王権にとつて絶対的に重要だとの認識があつたわけです。そのために、自分たちの皇祖神を大和から伊勢志摩に移すという決断をしたのではないかと思ひます。

【久米】はい。ありがとうございます。大変興味深い切り口であつたと思ひます。

簡単ですがまとめた方に入つていきたいと思ひます。

現在、『魏志倭人伝』と呼ばれる文献はかなり注目されて、そして、考古学的な事象もだいぶ分かつてきました。『魏志倭人伝』の世界もけっこう、九州のことを描いた部分を中心になつていそうだと分かつてきましたし、倭の背景には中国の後漢や魏の王朝の大きな力のバックボーンがあるということもはっきり見えて参りました。また、中国文献に接する時、「女王之所都」、「鬼道」などの用語一つにしても、日本人の感覚で安直に読んでしまわないようにとも諭されたかと思ひます。

今日は最先端をいっておられる先生方の最新研究の成果を伺ひまして、数多く教えられる点がありました。そして、一つのことを多面的に見る、清張先生の複眼思考は卓越した方法的な真骨頂であると改めて認識させていただきました。偉大な魂であつたと思ひます。



第24回

松本清張研究
奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。
ジャンルは問いません。ただし、未発表に限ります。
個人又は団体も可。

- 内容 入選者（団体）に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。

- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書に参考資料（すべて様式は自由、ただし日本語）、令和4年3月31日までに応募してください。
※詳しくは、ホームページをご覧になるか記念館までお問い合わせください。



第23回

松本清張研究
奨励事業入選企画

企画名

「万葉考古学」における都市と地方をつなぐ交通の研究

入選者

代表 上野 誠（國學院大學教授）

企画名

西園寺公望邸を中心とする元老の邸宅と「政治空間」に関する実証的研究—松本清張『昭和史発掘』「老公」などの成果の継承と発展

入選者

奈良岡 聡智（京都大学公共政策大学院教授）

清張の古代史学や『万葉集』研究を継承し、「万葉考古学」によって細分化された現在の万葉研究を巨視的に捉え直し、古代の人々の営みを解明しようとする研究と、元老の邸宅を「政治空間」として捉え、そのメカニズムを解明しようとする研究で、共に成果が期待されます。

新型コロナウイルス感染症感染防止に引き続きご協力をお願いします。

- ご来館の際は、マスクの着用、手指消毒、検温、ソーシャルディスタンスの確保をお願いします。
- 発熱や軽度であっても咳、咽頭痛等の症状がある場合は入館をお控えください。
- 感染拡大の状況により、休館や行事等が中止・延期となる場合があります。



昨年新型コロナウイルス感染症が拡大し、当館も臨時休館などで活動ができない時期がありましたが、感染予防対策を徹底し、9月からは特別企画展「松本清張と東アジアII」を、10月にはシンポジウム、11月には講演会を開催しました。今号ではシンポジウム「東アジアの中の邪馬台国—清張邪馬台国論の現在」についてご報告します。作家の坂上泉先生をお招きした講演会については次号でご報告したいと思います。（M.M）

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
https://www.seicho-mm.jp
制作 有限会社シーズ



イラスト:山藤 章二

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 毎週月曜日（休日の場合は翌日）、年末年始（12/29～1/3）館内整理日
- 観覧料 一般/600円（480円） 中・高生/360円（280円）小学生/240円（190円）（ ）は30人以上の団体
- アクセス JR：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からはバスをご利用いただく便利です（小倉城・松本清張記念館下車） 車：北九州都市高速・大手町ランプより5分

講演に行ってきました

日付	主催者・会場等
4月20日	年長者研修大学校周望学舎
5月7日	年長者研修大学校穴生学舎
7月7日	枝光市民センター
7月14日	枝光市民センター
10月21日	生活学校五月会
11月4日	門司区「新・元気塾」
11月5日	年長者研修大学校穴生学舎

